

令和3年度 奈良市立富雄第三幼稚園 研究実践概要

園長名 小西 茂美
全園児数 15名

1. 研究主題

「心身ともに健康で主体的に活動する幼児の育成」
～ ひと・もの・こととのふれあいを通して ～

2. 研究年度

3年度

3. 研究主題設定理由

核家族や少子化で、入園するまでは家庭中心の生活で温かく見守られていることとコロナ禍で自粛傾向にあるため、他者との関係が限られてしまう傾向にある。そのため、子ども同士や多様な人とのコミュニケーションを図る機会が少ない。そこで、さまざまなひと・もの・こととのふれあいやかわりを通して、感動体験を多く持ちコミュニケーション力を高めながら主体的に活動する幼児を育てたいと主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・幼児が身近なひと・もの・こととのかかわりの中で、様々な経験を重ね、心身ともに健やかで主体的に活動できる幼児を育てる。

②研究の重点

- ・さまざまなひと・もの・こととのかかわりを通して主体的に活動する力を育てるための環境構成や援助の在り方を考える。
- ・地域・家庭・保育園・小中高などその時の状況に応じつつ、でき得る限りいろいろな人たちとの交流や連携を通して、感動体験を積み重ねられるように、保育の工夫をする。
- ・感動体験では一人一人の感じ方が異なるため、一人一人を丁寧に援助していく。

③活動の方法

《4歳児》

事例1・「空っぽのカタツムリ」(6月)

幼稚園でたくさんのカタツムリを見つけ、毎日お世話をしている。飼育ケースを洗い、カタツムリに水をかけてあげている時に、A児「あれ空っぽだ!」B児「ほんとだ!!」と空っぽのカタツムリがいることに気づいた。A児「先生!大変やねん!」と保育者を呼びに来る。B児「空っぽやねん!」と心配そうな表情で訴える。保育者「ほんまや!空っぽやなあ」と答える。A児「先生、なんで」と尋ねる。保育者「なんでなんだろうね…。」「カタツムリの本に書いてあるかもしれないね。」とA児と一緒に本で調べ、他児も空になった



カタツムリを心配していたので、「皆はなんで空っぽになっただと思う？」と尋ねると、「お母さんのカタツムリが赤ちゃんを産んだからだと思う。」B児「そうそう。きっとカタツムリのお母さんは赤ちゃんを産むと死んじゃうねん」と自分なりに考えを出している。周りの幼児も、「私もそうやと思う」と口々に言う。本を見てみると、“マイマイカブリ”という虫がいてカタツムリを食べることが分かった。「知らなかった!!」と驚くとともに、「カタツムリさん可哀そう」とつぶやいていた。そして絵本を読み進めて行く中で「カタツムリの赤ちゃんは卵なんだね」「歯はいっぱいあるんだね」と色々なことを知ることができた。

〈反省・評価〉

身近な生き物にとっても関心を持ち、カタツムリは特に日頃から親しみを持って関わっていた。カタツムリが空っぽになっているという発見に伴って驚き生まれ、次に「なんでだろう」と疑問になり、友達や先生と話し合う中で、想像を働かし、意見や考えを出し合う姿が見られた。その後、絵本を見たことで疑問が解けたり新たな驚きが生じたりとカタツムリとのふれあいを通して主体的にかかわる姿が見られた。

事例2・・・「プレゼントをつくろう。」(2月)

1学期から継続して楽しんでいるお店屋さんごっこで、2学期末にポイントカードの制度が出来、スタンプが5個貯まるといいことがあるというルールを決めた。数日後「スタンプがもうすぐ貯まりそう。」と伝えてきた。そこで、ポイントが貯まったお客さんにプレゼントをつくることに決まった。A児は、次の日「この箱がいいかな？」と大きめの箱を選び、それに合わせて画用紙を切り、「これをボタンにする。」とつくり始めた。その日の話し合いで、A児「今、プレゼントの入れ物をつくっています。」と言うと、B児C児が「手伝うよ。」と3人でつくりはじめた。A児「ここに、プレゼントを入れて、ボタンを押したら出てくるようにしたいねん。ボタンはもう切ってる」、B児「ボタンを貼るのにこれはどう？」と小さいカップを取ってくる。カップに切った画用紙を貼り、押すといい感じに戻ってくるボタンを見て、A児は「いいね!」と笑顔になる。ボタンを箱に付け、中のプレゼントは、折り紙を折ってつくることに決めた様子を見て保育者が『折り紙の本』を提示した。A児「どれつくる？」B児「これにしよう。」とC児と3人で折り始める。できあがったものを他の遊びをしているD・E・F児の所に持って行き、B児「ボタン押して、手入れてみて!!」と言う。D児がボタンを押して箱の中からプレゼントを出すと、B児「ひよこがあったった!!」と喜ぶ。



〈反省・評価〉

最初は売り買いを楽しんでいたが、遊びをずっと継続していく中で、本物のお店には何があるか、どうしたらもっとお客さんがきてくれるのか考えるようになりポイントカードをつくったり還元されるプレゼントをつくったり社会生活での経験を取り入れて遊ぼうとする姿がみられるようになった。A児は、思いつくと先々進めてしまう幼児であり、B児は、自分の思いや考えを言葉にすることが苦手な幼児である。お店屋さんごっこを通して、A児もB児の考えを受け入れられるようになり、また、B児も自分の思いを保育者でなく、友達に伝えられるようになっていった。

《5歳児》

事例1・「アゲハ蝶、元気でね！」

A児「アゲハ蝶の幼虫を捕まえないねんけど」B児「ミカンの木にいるのかな」と二人で裏庭のミカンの木の所を探し始めた。「いた」「ほんまや」と飼育ケースにミカンの木も入れ世話を始めた。数日後、飼育ケースの端で動かなくなっていた。B児「あれ？こんなところでじっとしてる。なんでかな？」A児「餌入れたのになんでやる？」と餌の所に行かないことを心配していた。B児「形が少し変わってきたかも？」A児「ほんとや、背中が丸くなってる」と様子が違ってきたことに気づき始めた。C児「それってさなぎになるんちゃう？」B児「ほんま？そんなら大丈夫やな」と少し安心した様子だった。毎日様子を見に行っては「糸出てきたで」「さなぎになったわ」「色も変わってきたで」等、いつになったらさなぎからでてくるを楽しみにしていた。いろいろな図鑑を見て調べたりして2週間くらいたった時、登園してくるなりA児「わあ蝶にかわってる」B児「ほんまや、かわいいな。」A児「でも、じっとしてるな」B児「なんでうごかへんのやろ」とジーっと見詰めていた。T「少し様子みたら？」と羽化してすぐの様子なので待つように促した。時々様子を見に行っては「まだ、じっとしてる」と心配していた。お弁当前にB児が見に行くと「あっ、羽をばたばたしてる。飛びたいんかな」A児「ほんまや、逃がしてあげよう」と言っていたがB児「いやや、このまま飼いたい。お花とってくる」と逃がすのをいやがった。A児「でも、外のほうが広い飛びたそうやし」とB児に蝶々の気持ちを考えるように話をしていた。T「そうやね、Bちゃんも狭いとこにずっといれられたらどう？」C児「そうや、いっぱい飛びたいで」と他の幼児や保育士の話をきいて気持ちも逃がす方に傾いた。B児「そんなら、逃がしてあげるわ」と皆と一緒に飼育ケースのふたを開け、逃がした。A児「ばいばい、また遊びにおいでね」B児「ばいばい、また来てね」と手を振っていた。蝶が子ども達の上を1周するとA児「ばいばい、ありがとうって言うてるわ」と蝶のしぐさを見て蝶の気持ちを思っていた。B児は行ってしまうと泣きだしてしまった。T「行ってしまったの寂しかったんだね。大事に育てたからね。でも、きっと蝶々も喜んで思うよ。また、遊びに来てくれるかもね」とB児の気持ちを受け止めると頷いていた。その後、同じ色の蝶を見かけると「あの時の蝶々が遊びにきてくれたんかな」と嬉しそうつぶやいていた。



〈反省・評価〉

アゲハ蝶の幼虫が蝶になるまでの変化を目の当たりにしする中で、心配したり、安心したりいろいろな気持ちが生じたが、友達や保育士の言葉がけでアゲハ蝶になるのを楽しみに待ち喜びを味わうことができた。しかし、大切に育てたゆえに飼育ケースでは飼い続けられないという状況を理解できる気持ちと受け入れられない気持ちの間で葛藤しながらも蝶の気持ちを考えて広い世界に放してあげることの大事さを知ったようである。その後も、自分にとって蝶は友達だという気持ちを持ち、会いに来てくれたという嬉しさを表現していた。

事例２・・・「キャンプごっこで魚釣り」

砂場の横でキャンプごっこが始まった。A児が「ご飯のおかずを魚を釣ってこよう」と50cmくらいの細いしなった枝を拾ってきて「これで魚を釣ろう。」最初は、枝の先にポプラの葉っぱを突き刺して「魚が釣れた」と喜んでいた。しかし、それでは面白くなく「ひもをつけてみよう」とタフロープの三つ編ひもを見つけてつりざおにしたが釣れなかった。



その様子を見ていたB児が「魚釣りさせて」A児「いいよ。でも針がないから釣れなかったん。針何がいいか考え中」そしてC児も加わり「とがってる」「先が曲がってる」などつり針の特徴を出し合い3人で探し始めた。A児が「先がとがっていて少し曲がっているのを見つげると「これでいけるな」と3人がうなずき合っていた。しかし「釣れへんな。なんでやろ」と困っているとA児「釣れた！穴をめがけたら釣れるわ」「穴があいてる葉っぱを集めよう」「大きめの穴があいてる方が釣りやすいな」みんな葉っぱ集めに走って行った。

〈反省・評価〉

最初は自分なりに考え試してみたが釣ることができなかった。友達に困っていることを伝え、共に考えてもらったり、同意してもらうことで自信にもなり、また、失敗しても考え合うことでやってみようという意欲になり、成功体験を味わうことができた。

5. 研究の成果

- ・初めての集団活動において、保育者との「温かいかわり」が次の活動に取り組むきっかけとなった。
- ・園内だけでなく、感染症拡大防止対策を取りながら、できる範囲で様々な人たちとのかわりを持ち、交流する中で刺激を受けたり、感動体験を重ねたりすることで、主体的に活動しようとする姿が見られた。
- ・今年度は特に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、人とかわる際に内容・行動などに制限がかかり十分な関わりを持つことができなかった。その中でも、「魅力ある保育」を探求し、感動体験を重ねられるよう工夫した。

6. 今後の課題

今年度で閉園となるが、様々なひと・もの・こととのかわりの中で、自分の思いや考えを表現したり、相手の事を思いやったりするコミュニケーション力が少しずつ身に付いたように思われる。コロナ禍で人との関わりを十分にすることは難しい中で、出来るところからはじめ、様々な経験を積み重ねることができた。今後、公立園としての思いや教育内容を公私連携幼保連携型認定こども園に引き継いでいき、3歳児から5歳児の発達を見据えながら主体的に活動する幼児の育成に努めることを課題とする。